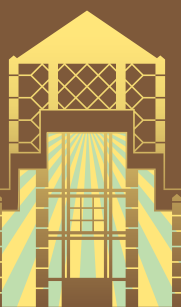
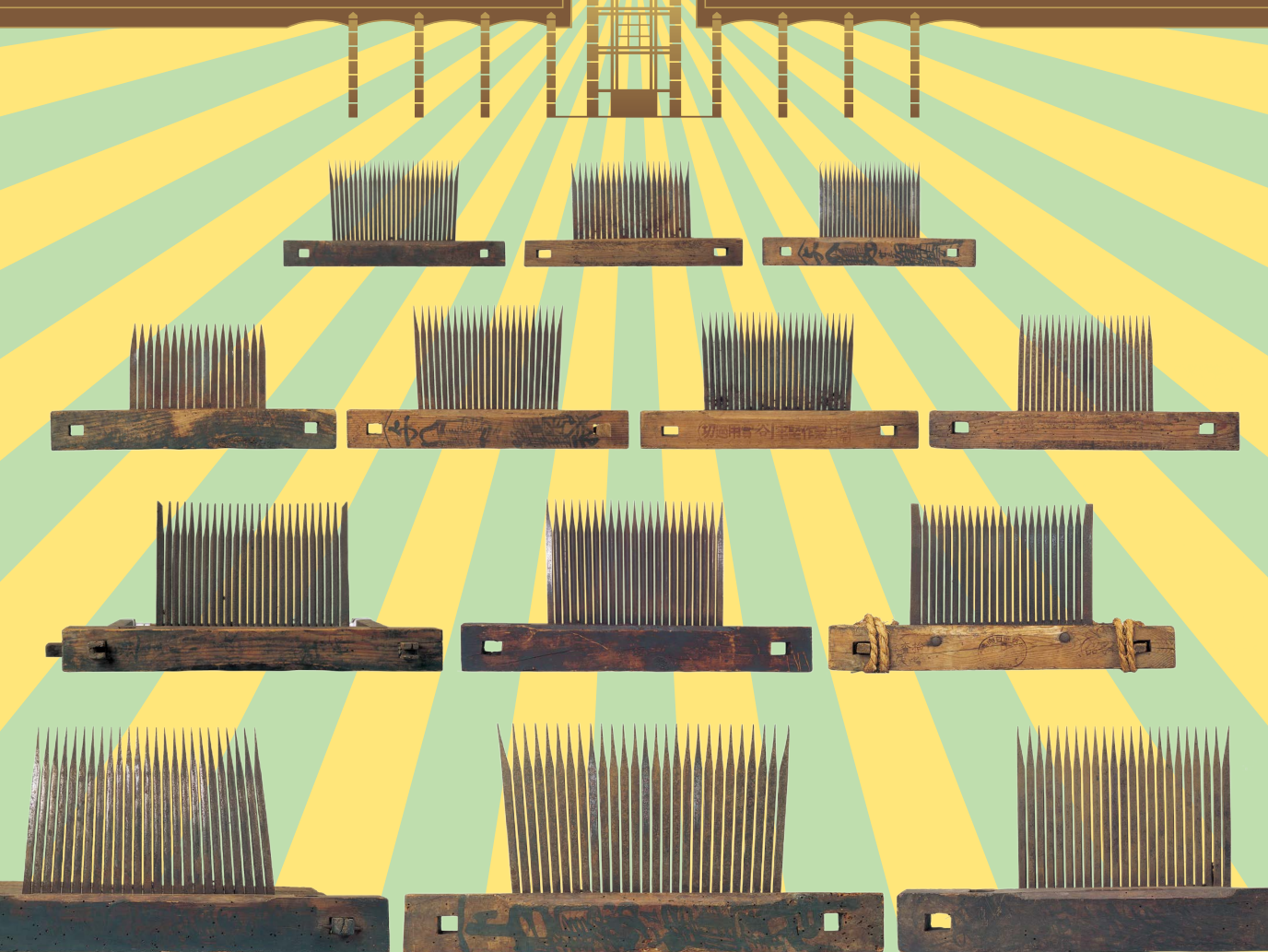


YOKOHAMA HISTORY MUSEUM

横浜市歴史博物館



News No. 60
2026.8



特集 デジタルアーカイブ公開にあたって^②

学芸員の推しの収蔵資料^④

企画展関連余話

企画展「横浜絵の深層—ジャンルか、イメージか、それとも輸出美術か」に寄せて^⑧

特別展「南武蔵の平安仏」開催にむけた仏像調査^⑩

副館長コラム^⑫

大塚・歳勝土遺跡公園だより^⑭

30周年記念誌 公開!^⑮

表紙資料の解説^⑯

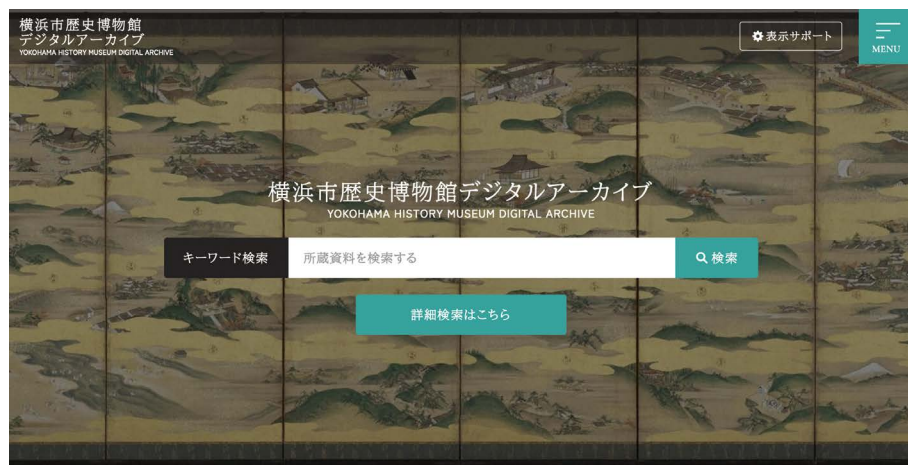
特集

横浜市歴史博物館の

デジタルアーカイブ公開にあたって

横浜市歴史博物館では、令和八年（二〇二六）三月三十一日から収蔵品のデジタルアーカイブを公開しました。考古・美術・歴史・民俗分野の資料約十二万点から、四七、三七〇件の情報を検索・閲覧することが出来ます（二〇二六年八月現在）。そのうち画像が見られる資料は現在美術を中心とした一、二二二件、今後も順次公開点数を増やしていく予定です。

このデジタルアーカイブという言葉、近年頻繁に耳に思うと思います。デジタルアーカイブという言葉自体は、デジタル技術を用いて作られたアーカイブという意味の造語で、そもそもアーカイブとは古文書や記録類、文書や公文書を保管する公文書館というのが元来の意味となります。加えて文化的価値や公共的共有財産としての価値があり、将来にわたって保存される資料のことをさし、さらにその保存場所や保存期間をいいます。ミュージアム、図書館、文書館の収蔵資料だけでなく自治体・企業等の文書や映像といった有形無形の文化、産業遺産など内容は多岐にわたります。デジタルアーカイブは、これらを収集しデジタル方式で記録し、データベース技術を用いて保存・蓄積し、ネットワーク技術を用いて検索可能にして、継続的に活用することをさ



横浜市歴史博物館デジタルアーカイブサイト トップページ

します。博物館活動を通して蓄積されていった作品・資料のデータは、研究や学習支援、地域の振興、経済的寄与あるいは防災といった新たなコンテンツの創造や活用へと寄与していくことになります。また、分野や機関を横断した情報の連携・共有も可能となり、インターネットを介して時間や場所の制約を受けず情報やコンテンツへのアクセスが容易になります。その内容は、日々の資料整理・調査研究で蓄積されていった情報、つまり「博物館活動Ⅱ館の歴史」が元となっているということです。

さて博物館は、平成七年（一九九五）の開館以来、考古・歴史・民俗の三分野でしたが、平成三十一年（二〇一九）より美術分野を加え、博物館活動を継続してきました。今回のデジタルアーカイブ公開では、まず館内職員の管理用データベースを刷新し、それにとりも改めてメタデータの設定を行いました。すなわち、各分野において資料のサイズや、分類など記録すべき内容・情報といった項目を整理し直し、また収蔵資料の画像データを新たに撮影し直すなどしてデジタルアーカイブ公開のための下準備を行いました。そうした下準備をした上で、フロントサイトといわれる一般利用者向けの公開用

データベースの構成、仕様、デザイン、どのような画面表示にするかといった内容を決め、システム設計を行う会社へ委託し打ち合わせを繰り返しながら設計をしてもらいました。

本サイトを構築するにあたり一番考えたかった点は、「できるだけ誰もがアクセスできるようにする」という前提条件のもとで、デザインや仕様を決めることでした。例えば、視認性を高めるためのUDフォントの使用、ロービジョン（弱視）の方に配慮した「文字サイズ」調整、色覚多様性に対応する「色合い」の変更、視覚障害の方のための「音声読み上げガイド」のほか「ふりがな」「キーボード操作ガイド」といった表示サポートを実装しました。それでも至らない点もありますが、コンテンツへの基本的なアクセシビリティは確保できたかと思っています。

具体的な収蔵資料情報や画像利用の面では、基本的にはパブリックドメイン（公衆の自由利用が可能な素材・知識）として公開していますが、様々な事情によって資料の利用が制限されることもあります。そのため、利用規約をご確認いただき、制限があるものについては非商業利用（研究利用など）の範囲内でご利用ください。

画像利用について補足すると、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスという著作権の意思表示をするための国際的なオープンライセンスを採用しました。これは、「表示・非営利四・〇国際」(creativecommons.org) に規定される著作権利用許諾条件「CC BY-NC」と互換性を持たせてあります。つまり、「著作権者のクレジット（氏名や作品



▲画面右上の「表示サポート」ボタンから、「文字サイズ」「色合い」「ふりがな」などを設定できる。



◀各資料の詳細ページ

タイトルなど」を表示すること」を条件に、非営利目的であれば画像を利用していただけます。

ただし、商業利用や、ウェブサイトに掲載されていない資料の画像や、より高解像度の画像など、本サイトに含まれないコンテンツの利用についてはそのかぎりではありませんので、その場合は利用申請をしていただくか、画像利用担当窓口までお問い合わせください。

デジタルアーカイブで重要なことは、「継続性」です。作品・資料の情報・画像を公開すればそれで終了ではなく、ランニングさせていくというミッションが見落とされがちです。そこには維持費も含まれます。もちろん博物館側が収蔵品情報を更新していくことは当然ですが、外部の利用者によって新たな発見や創造が生まれ、それがアーカイブを継続させる力にもなります。まだまだ充実しているとは言えませんが、ぜひ皆さんの手で広くご利用ください。（文 吉井大門）

デジタル
アーカイブは
こちらから



<https://archive.ymh.jp>

この資料のデジタルアーカイブはこちら▶



美術担当学芸員の推しの収蔵資料

役行者像

修験道の開祖である役小角の姿をあらわした像です。役小角は七世紀後半から八世紀頃の宗教者です。役小角については『続日本紀』文武天皇三年（六九〇）五月二十四日条に、葛城山（大阪府と奈良県の境に位置する山）に住む呪術者だったが、その呪力をねたんだ弟子の韓国連^{かんとくしん}広定の讒言^{ざんげん}によって伊豆に配流された、と記されています。その後、平安時代初期には、鬼神を使役して葛城山と金峯山（奈良県吉野郡の山）の間に橋をかけさせた、伊豆の島と富士山のあいだの空を飛んで行き来した、というような数々の伝説が作られました。鎌倉時代初期以降には修験道の始祖とされ、「役行者^{えんのかぎょうしや}」と呼ばれて信仰されています。

役行者の姿は絵画や彫刻でさまざまにあらわされていますが、彫刻作例のうち造立年代のあきらかなもので最も古いのは、弘安九年（一二二八）慶俊作の奈良国立博物館像



役行者像

です。以降多くの作例は、頭巾を被り、裾の短い衣を纏い、高下駄を履いて岩座の上に腰かけ、右手に錫杖、左手に巻物を持つ姿で、長い顎鬚を垂らし、開口する忿怒形^{ふんごぎょう}であらわされます。当館所蔵の役行者像もこの通例に沿った姿ですが、忿怒形を基本とする役行者像のなかでは比較的穏やかな面貌なのが特徴です。

この像は、もとは横浜市港南区の市立桜岡小学校郷土資料館にありました。現在は体や脚の部材が離れてしまった状態で当館が保管していますが、仮組すると像高（座高）一〇三cmになります。立ち上がったときに五尺くらいの大きさになる等身像としてつくられたようです。頭部背面の薄材も外れており、裏面に次のように墨書があるのが見えます。

文化十四年七月吉日

御用大仏師

法橋世啓

門弟友吉



頭部背面材裏面墨書

この銘文により、文化十四年（一八一七）七月に法橋世啓および友吉によって造られたことがわかります。世啓は仏師界の伝統ある法橋位を名のりますが、門弟友吉ともにこの像の他に作例は知られておらず、どこでどのように活動していた仏師であるかは不明です。また、桜岡小学校所蔵以前の来歴もよくわかっていませんが、製作年代と作者がわかる作例として貴重なものなのです。

（文 花澤明優美）

この資料のデジタルアーカイブはこちら▶



民俗担当学芸員の推しの収蔵資料

豆念仏講道具



豆念仏講道具



豆念仏講の様子（2024年）

この資料は、青葉区黒須田地域で行われていた豆念仏講の大日如来像、講道具などからなる資料です。豆念仏は、講員が唱え言を唱え大きな数珠をまわすという、いわゆる念仏講の形態をとります。豆（大豆など）の収穫時期にあたる九月十三日に、講員が当番のイエ（辞める前の何年か前からは自治会館）に集まり、大日如来像を祀った前で、「ナムアミダブツ」と念仏を唱え大きな数珠をまわします。その後、皆で直会をし、団子や漬物、果物などとともに豆や豆腐なども食べます。豆念仏の由来譚としては、ある日、黒須田村を訪れた山伏（僧侶とも）が、一夜の宿を借りそのお返しにと渡されたのが大日如来様で、それ以来、講が始

まったとされています（このため大日講とも呼ばれます）。豆念仏は女性たちが中心となって行われていましたが、戦後になると男女関係なく各イエから人が出て講を行ってきたといえます。また、かつては講が終わると一軒一杯ずつ、お祝いっぽいの豆やお菓子などが配られ、子どもたちの楽しみでもあったようです。豆念仏を行うイエは地域の草分け的な十八軒で、各イエを単位とした講員によって運用され、寺による関与は特段ありません。

「自分たちでさえ起源などが分かっていないのに、次の世代は何も知らずカタチだけが続く」ことを憂慮した現在の講員十八軒が「おごなりになつて廃れていくより、自分たちの代で『けじめ』をつけよう」と相談して豆念仏の終了を決めました。また「昔から何があってもこの日だけは十八軒が揃い、健康や安全を祈ってきた」とされる講でしたが、前述のように十八軒全軒が参加できなくなったことも辞めるきっかけとなったといえます。ちなみに当館は、二〇二四年九月十三日の最後の豆念仏に立ち合い、写真資料・動画資料の記録を行い道具だけではない多面的な資料の補完も行いました。

黒須田地域で行われていた民俗行事の歴史的記録という意味や、地域史を考えるうえでも貴重な資料であるといえます。

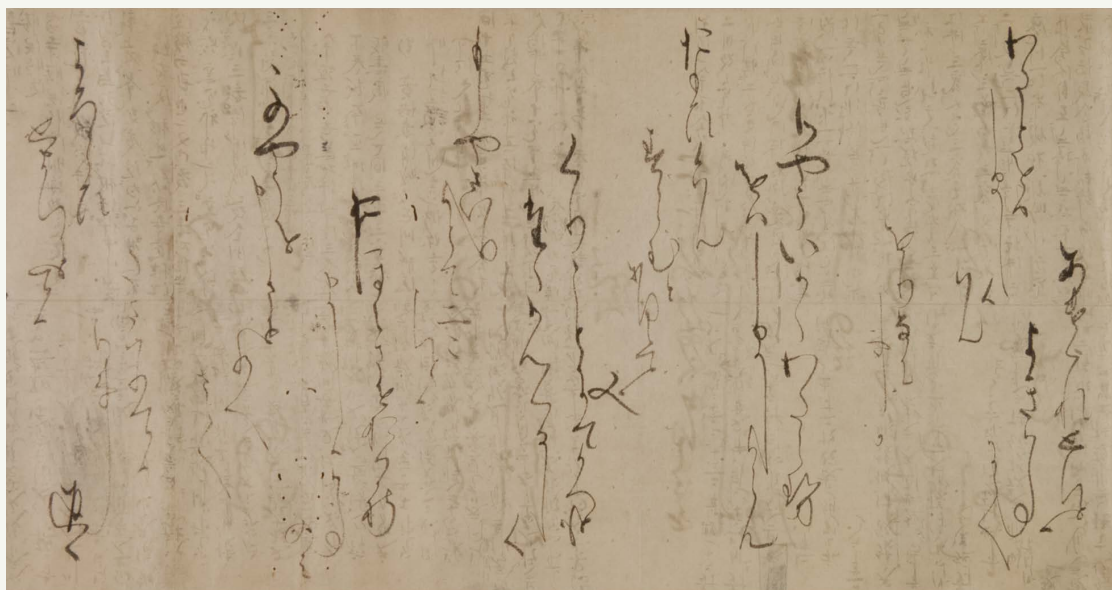
（文 小林光一郎）

この資料のデジタルアーカイブはこちら▶



歴史担当学芸員の推しの収蔵資料

鎌倉時代仮名消息 (横浜市指定文化財)



鎌倉時代仮名消息 第一紙

この資料は、女性の手による複数の手紙(消息)を一巻にまとめたものです。紙の幅や内容などから全十四紙のうち、一紙と二紙、三紙と四紙、五紙と六紙、七紙と八紙、九紙と十紙、十一紙と十二紙、十三紙と十四紙がそれぞれ一通とみられ、あわせて七通が含まれると推測されています。内容ははつきりしませんが「甲斐御房の御方」(六紙)、「心戒の御房 御返事」(十二紙)、「ちやうらうの御方」(十三紙)などの記述から、僧侶に宛てた手紙であること、また「散らし書き」と言われる優美な筆運びから、比較的身分の高い女性によって書かれたことがわかります。

これら手紙の紙背(裏面)には聖教(仏典や高僧の著作など)が書き写されていて、十紙目の紙背に「薄草子口決第十三」とあることから、鎌倉時代の僧・頼瑠が記した『薄草子口決』の写しであると考えられます。これは、醍醐寺三宝院(京都市)の僧侶・成賢が曼荼羅の諸尊を供養する法会の作法を記した『薄草子』に、実際に法会を行う際に伝授される口伝(口決)を加えてまとめたものです。当時、真言密教では教義の実践やその作法・修行方法について様々な流派が生まれ、その拠点の一つが醍醐寺でした。頼瑠は成賢の弟子・憲深に三宝院流を伝授され、翌弘長三年(一二六三)に同書を著しています。この頼瑠が活動拠点を根来寺(和歌山県)に移した後、弟子の頼縁は『薄草子口決』を含む三宝院流聖教を精力的に書写し、関東流布を目的として永仁三年(一二九五)に鎌倉に下向しました。頼縁の足跡は鎌倉を中心に慈根寺(八王子市、現・廃寺)や小手保河保坊(福島県川俣町)などに広がり、当時、真言律宗の道場となつて南宋の禅僧たちも受け入れていた称名寺(横浜市金沢区)でも、二代長老・鈿阿のもとで同書が書写されていたようです。女性の手紙に登場する僧「心戒」は、この鈿阿のもとで聖教類の書写に従事した人物であることから、書状はおそらく、金沢北条氏一族にかかわる女性たちによって、称名寺僧侶に宛てて書かれたものだったと考えられます。(文 阿諏訪青美)

この資料のデジタルアーカイブはこちら▶



考古担当学芸員の推しの収蔵資料

原出口遺跡出土 筒形土偶



筒形土偶

横浜市歴史博物館常設展示室原始Ⅰに、縄文時代、粘土で人を模して作ったと考えられる「土偶」を何点か展示しています。その中で特に目を惹くものとして筒形の胴部に斜め上方向、こちら側に顔を向けているものがあります。この土偶は自立していますが手足はなく、その表情は、つながつた眉と鼻、切れ長の目、ぽっかり空いた口と、現代人から見ればどこことなくユーモラスに感じます。これは筒形土偶といい、今からおよそ四〇〇〇年前の縄文時代後期、南関東地方の遺跡で見つかることが多い資料です。この土偶は、横浜市都筑区の原出口遺跡の住居跡からバラバラの状態で見つかりました。この筒形土偶が見つかった住居跡からはさらに、棒に短い手足と乳房がついた土偶も見つかっています。棒状の土偶は自立せず、筒形土偶と同じように顔は斜め上方向を向いて粘土紐で眉毛と鼻を表現しています。ほかにも液体を注ぐ急須のような形をした注口土器や、やや小型の石棒なども見つかっています。



ユーモラスなお顔立ち



一緒に見つかった土偶(右側)

土偶がどうして作られたかについては今も昔も数多くの議論がなされており、この住居跡で縄文時代の人たちがどのような考えで土偶を使ったのかについてははっきりと示すことができません。しかし、この筒形土偶、学芸員も大変ユーモラスに感じていたの、思い切って「はらでぐちくんといっしょ」という名称で現在横浜市歴史博物館のオリジナルグッズのひとつとしてぬいぐるみ化しました。縄文人と現代人、実は脳の仕組みに大きな違いはないと考えられているため、案外縄文時代の人たちも、現代のフィギュアのように飾って楽しんでいたのかもしれないですね。

ぬいぐるみキーホルダー

「はらでぐちくんといっしょ」は横浜市歴史博物館ミュージアムショップや同館オンラインショップから購入が可能です。ぬいぐるみを買って本物も見に来てください。



ぬいぐるみキーホルダー「はらでぐちくんといっしょ」

(文 橋口豊)

企画展

横浜絵の深層

—ジャンルか、イメージか、それとも輸出美術か—

に寄せて

「横浜絵」という言葉をご存知でしょうか。その言葉を耳にしたとき、具体的にどのような作品を指しているのか、正確にイメージできる人は多くないかもしれません。端的にいうと、そもそも「横浜絵」とは、幕末から明治期にかけて開港地・横浜から海外へと輸出された、外国人向けに作られた絵画作品全般をいう、きわめて包括的で広い意味を持ちました。これらは、開国にともなって日本を訪れた外国人の「土産物」として買い求められ、海外へと流出してしまっただけでなく、国内に作品が残りにくく、どのような作品がどこへ渡ったのかという全貌の特定が極めて困難でしたが、研究者やコレクターによって部分的な所在や実態は徐々に把握されてきました。

この「横浜絵」の展開において最初に関わったのが、初代五姓田芳柳（一八二七—一九二）をはじめとする五姓田派の画家たち、そして、その息子である義松（よしまつ）でした。幕末から明治初期にかけての日本は、まだまだ西洋画の技法を手探りで修得していった過渡期にあたりました。その模索の時期に描かれた《西洋老婦人》【図1】は柔らかな陰影のぼかしや細やかな筆

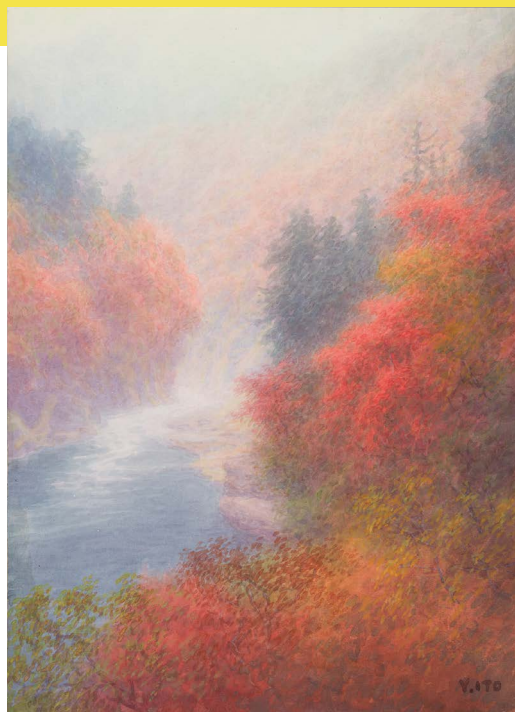


【図1】初代五姓田芳柳《西洋老婦人像》
絹・水彩、慶応年間～明治初頭、神奈川県立歴史博物館

【図2】初代五姓田芳柳《風俗図屏風》
紙・水彩力、慶応年間～明治初頭、郡山市立美術館



致により違和感なく描かれた肖像画であり、こうした肖像画は写真をもとにして制作されたと推定されます。この五姓田派による和洋融合の肖像画や《風俗図屏風》【図2】といった風俗画が「横浜絵」であり、その需要は国外のみならず国内へも広がっていきました。やがて明治二十年代中頃からは、国内における水彩画隆盛期のはじまりと来日外国人の増加も相まって、日本の風景や風俗を情緒的に描いた水彩画作品が「横浜絵」の主力となっていきました。国外へ渡っていったこれら明治期の水彩画については、近年、高野光正氏の膨大なコレクションを紹介する展覧会が各地で開催されたことにより、その美術史的価値が広く知られるようになってきています。これら観光外国人をターゲットとした絵画ビジネスは、彼らが必ずといっていいほど訪れる景勝地である日光や箱根へも拡大していきました。そこには画商が生じ、画家がおり、横浜と同質の売り絵を制作・販売し、横浜へと流通したと考えられ、これらもまた「横浜絵」の重要な一側面を形成していました【図3】。



【図3】Y. Ito《紅葉の溪谷》紙・水彩、明治時代後期、星野画廊

幕末から明治期における日本はこのままでの伝統的な日本画に加えて、油彩画や水彩画、さらには写真、新たな印刷技術といった西洋の新しい視覚メディアが浸透し表現形態が変化・変容を遂げていった時期にあたります。こうした視点に立った時、「横浜絵」を広義に捉えるならば、外国人好みの風異な日本画（花鳥画など）、さらには明治初年以降、輸出用の陶器、漆器、唐傘、扇子といった工芸品の下絵まで広義の「横浜絵」の潮流として位置づけることができるでしょう。本展覧会では、五姓田派やその周辺の画家、横浜で活動したことが知られる、渡辺豊洲や中山年次といった作家、「神奈川の記憶展」【図4】、あるいは作品に遺されたサインのみによって辛うじて存在が知られる逸名画家を紹介することで、ややミクロな視点から「横浜絵」の具体像をみていくものです。ぜひ会場でご覧ください。

（文 吉井大門）



【図4】笠木治郎吉《海辺の姉弟》紙・水彩、明治35年（1902）、かざぎ画廊（横浜市歴史博物館寄託）

特別展「南武蔵の平安仏」

開催にむけた仏像調査

今秋開催の特別展「南武蔵の平安仏」は、古代横浜周辺の仏教世界を、横浜・川崎に伝わる仏像から見ていただく展示です。本展の見どころのひとつが、約三十年ぶりの寺外公開となる川崎市宮前区・影向寺本尊の薬師三尊像です。影向寺はこの地域を代表する古刹として知られ、発掘調査の成果から、創建年代は七世紀末～八世紀初頭の飛鳥時代にまでさかのぼると考えられています。本尊薬師三尊像は早くに国の指定を受け（重要文化財）、関東の平安時代彫刻作例のひとつとして紹介されてきました。

三尊像というのは三体セットの仏像のことです。中尊（真ん中）の薬師如来は像高一四二・三cmの座っている像、脇侍（中尊の両脇）の菩薩は左が一七一・一cm、右が一七二・六cmの立っている像です。中尊薬師如来像は立ち上がったとすると約八尺、二m四十cmを超えるような大きさです。

展示前の令和八年（二〇二六）一月に、この大きな三尊像の調査・撮影を二日間かけて行いました。撮影セットを組むために、普段は薬師堂裏手の収蔵庫内に安置されているお像を、寺内の別の建物に移動しました。

まずは、お像に傷がつくことのないよう、仮梱包をしたうえで、慎重に収蔵庫から出します。薬師如来像はたいへんな重量のある像で、完全に持ち上げるには六～八人ほどの人手が必要でした。調査経験も豊富な先輩学芸員が「こ

れまでに扱った仏像のなかで一番重いかもしいない」とつぶやくほどの重さでしたが、無事に調査場所へ移動することができました。

仮梱包を解いたら調査をはじめます。「仏像調査」の目的の多くは、仏像研究の基礎となる情報を記述と写真の両方で記録することです。まずは言葉での記録として調査を取ります。基本的な記録項目は「形状」「法量」「品質構造」「保存状態」です。形状は髪型からはじまり着衣の着け方、手の組み方、脚の組み方まで詳細に記します。法量は大きさのことです。折れ尺やメジャーを駆使して、背の高さ、顔の長さ、体の厚みなど各部を計測します。品質構造の項目には、像の材質や構造技法を記しますが、これを確認するために像を寝かせて底から観察することもあります。保存状態の項目には破損箇所や過去に施された修理箇所を記します。調査を取り終わると写真撮影をしますが、仏像は立体物ですので様々な角度から撮る必要があります。影向寺薬師三尊像は大きな像で、位置を変えるのにも一苦労でした。

この二日間で、薬師三尊像に加えて同寺の二天像の調査も行い、計五軀の仏像を前述の方法で調べました。いずれも特別展に出陳予定で、この調査で得た情報をもとに、展覧会会場の解説や展覧会図録を作成し、ご来館のみならずにお像を紹介いたします。

影向寺の諸像と同じように、特別展出陳のほかの仏像の調査を行ってきました。展示でこれら平安仏との出会いを楽しみにしていただけたいと思います。

*仏像世界の案内人として、四ページでご紹介した役行者像も活躍予定です。お楽しみにお待ちください。

（文 花澤明優美）



⑤写真撮影



④法量の測定・記録



③調査前の簡易クリーニング



①仮梱包



②調査場所への移動

企画展情報

特別展「南武蔵の平安仏」

会 期

令和8年10月31日(土)▶12月13日(日)

休館日

毎週月曜日(ただし11月23日は開館)、
11月24日(火)



このたび令和八年（二〇二六）四月より横浜市歴史博物館の副館長に就任しました古屋紀之です。このコーナーは本来「館長コラム」のコーナーですが、今回だけ特別に副館長のコーナーにさせていただきましたので、自己紹介とともに、私の歴史博物館での初仕事「講座古代人の鉄づくり」のご報告をしたいと思います。

私は大学で考古学を学び、大学時代は主に古墳の出現と土器を使用した葬送祭祀の研究を行いました。その後、東京近郊各地で非常勤職員を経験し、平成二十年（二〇〇八）になって現在の（公財）横浜市ふるさと歴史財団に就職しました。私の所属は埋蔵文化財センターでしたので、港北ニュータウン遺跡群の出土品の整理をしたり、市内遺跡の発掘を行ったりしました。横浜は弥生時代の大塚・歳勝土遺跡をはじめとして、全国的に著名な遺跡が多く存在します。私も大学時代は、当時当館の初代考古担当学芸員であった安藤広道さん（現慶應義塾大学教授・当財団理事）の論文を読んで、全国の弥生集落論をけん引した港北ニュータウンの集落論を学びました。そんな横浜に職を得ることができて、身の引き締まる思いをした覚えがあります。令和四年度（二〇二二）から埋蔵文化財センター所長を拝命し、現在

副館長コラム

古代の製鉄を語る

—栄区上郷深田遺跡の発掘調査成果—

副館長 古屋紀之



調査中の上郷深田遺跡遠景（昭和61年）



6月21日に行われた講座「古代人の鉄づくり」の会場の様子

も兼務しています。さて、私の歴史博物館での最初の大きな仕事は、春の子ども向け展示「君も今日から考古学者！」展（担当：橋口学芸員）の付帯事業で行われた講座「古代人の鉄づくり」の講師でした（六月二十一日開催）。この企画は、一昨年度に埋蔵文化財センターで刊行された横浜・栄区の上郷深田遺跡「上郷深田遺跡」の発掘調査報告書刊行を記念して行われたもので、古代史ファンを対象に、前半は佐藤信館長が古代武蔵国・相模国の様子をお話しし、後半は私が上郷深田遺跡における古代の鉄づくりの実態を紹介しました。

実は、飛鳥時代から奈良・平安時代にかけて、関東・東北を含む東国には多くの製鉄遺跡が形成されました。一説によれば、それは当時東北に住んでいた「蝦夷」との戦争に使われる鉄製の武器・武具を製作するためといわれています。ただ、東北では福島県の太平洋側、関東

では群馬県・埼玉県・千葉県などに多くの製鉄遺跡が存在しますが、実は神奈川県では、この栄区上郷深田遺跡の他はまだ発見例がなく、県内唯一の貴重な製鉄遺跡となっています。栄区では区民の皆さんからとても大切にされている遺跡です。

上郷深田遺跡は東国の製鉄遺跡としては非常に古い部類で、七世紀末には「箱形炉」と言われる古いタイプの製鉄炉による製鉄が始まっています。そして、八世紀前半には、これも他地域に比べるとかなり早いタイミングで「竪形炉」という新型の製鉄炉が導入され、八世紀後半には製鉄を終えたようです。

また、八世紀前半～中葉の竪形炉の製鉄時期には、鍛造工房や鑄造工房が併設され、と



調査中の製鉄炉（箱形炉）



製鉄炉（竪形炉）



鑄造用溶解炉（鑄銅炉）



畿内系暗文土師器（7C末～8C初）

くに鑄造の方は金属分析の結果から鉄だけでなく銅製品の鑄造も行われていたことが分かりました。溶解炉の付近からは鑄型の破片も出土しています。

これら上郷深田遺跡の製鉄の原料として砂鉄が出土しています。ではこの砂鉄はどこから持ってきたのでしょうか。実は、三浦半島の付け根付近は火山灰由来の鉄分が地層の中に多く含まれており、それが雨水や河川の浸食作用で長い年月をかけて大量に河口に運ばれ、波の作用で海岸に濃集されます。今でも鎌倉市稲村ヶ崎や行合橋の海岸では濃集した砂鉄が黒々と溜まっているのを見ることがができます。こうした浜砂鉄が馬に積まれて遺跡まで運ばれたと考えています。

では作った鉄は何に使われたのか？ 遺跡からは鎌倉郡中樞で出土する「畿内系暗文土師器」とよばれる精巧な土器が出土するため、古代鎌倉郡の官営工房と考えられています。とすると、郡家（古代の郡役所）や郡寺の造営に使われたと考えられますが、遠く蝦夷戦争に供されたと考えられる研究者もいます。上郷深田遺跡の鉄をめぐる議論はまだまだこれからと言えそうです。

（今年十月に栄区本郷台の複合施設「地球市民かながわプラザ」にて上郷深田遺跡の謎に迫る展示・成果発表会を行います。詳しくは（公財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターのホームページでご確認ください。）

30周年記念誌 公開!



博物館のあゆみを年度ごとに紹介したページ



歴博コラムのページ

前号で経過報告をした『横浜市歴史博物館30周年記念誌』が完成し、公式ウェブサイトでもPDF公開をはじめました。博物館のあゆみを十年ごとに紹介するページや、博物館で活動する関連団体の紹介、三十年分の統計データなど、六分割で公開していきますので、当館の円形の常設展示室を観覧する時と同じように、気になるところからご覧下さい。

それぞれの時期を知る様々な立場の方のコメントからは、博物館の多様な事業展開を生き生きと感じ取ることが出来ます。関連団体のページでは、博物館に関わる人の層の厚さと、それぞれが熱き志を持って活動を積み上げてきたことを実感します。そして、「まちと歴史博物館の移り変わり」では、博物館が開館してからの周辺地域が、驚くような変貌を遂げてきたことが見て取れるのではないのでしょうか。ぜひ、家族や友人とアルバムを楽しむように、多くの方にページをめくっていただきたいと思えます。

そして、年度ごとの展示会ポスターなど活動の写真を眺めながら、来し方を懐かしむだけでなく、これからの地域における博物館の有りようや、まちづくりを仲間とともに考えていく「対話」の一助になればこの上ない喜びです。

記念誌に収めきれなかった三十年分の日誌や刊行物リストなどの「記録」は、別途公開を目指していますので、そちらもご期待ください。

※パソコン等からご覧にならない方は図書閲覧室をおたずねください。(PDFをプリントしたものを閲覧できます。)

(文 古川恵美)



記念誌表紙

記念誌公開サイトはこちら▶



大塚・歳勝土遺跡公園だより

横浜市歴史博物館の隣、大塚・歳勝土遺跡公園ではたまに鉄をつくります。鉄をつくるとはどのようなこと?かという、不純物がたくさんまじっている砂鉄に風を送りながら炭で燃やし続けて、鍛冶に適した鉄をつくるということです。これは「たたら製鉄」といって、古くから行われていた鉄づくりの方法です。

横浜と「たたら製鉄」との間には何か関係があるのでしょうか。なんとしっかりとあります。横浜市内には現在のところ神奈川県唯一の古代製鉄遺跡が見つかっています。横浜市歴史博物館のある都筑区からずっと南、栄区の上郷深田遺跡です。上郷深田遺跡からは「たたら製鉄」の痕跡として製鉄炉の跡や砂鉄、鉄づくりによって発生した不純物といった数々の遺構・遺物が発見されました。

令和8年(2026)4月18日～6月21日まで開催した企画展「君も今日から考古学者!—横浜発掘物語

2026—」では「たたら製鉄」を展示テーマのひとつとして「古代人の鉄づくり」というコーナーを設け、上郷深田遺跡の調査成果や「たたら製鉄」実験成果、鍛冶遺跡である都筑区西ノ谷遺跡から見つかった大鎧の素材となる小れなどの展示を行いました。

更に会期中の5月10日には参加型の「たたら製鉄」実験である「たたら製鉄を体験してみよう!」、6月21日は企画展関連講座「古代人の鉄づくり」と題して、当館館長佐藤信と副館長古屋紀之の両名から古代の相模・武蔵地域の社会体制と製鉄との関係について講演いただき好評を得ることができました。

企画展示は終わりましたが古代製鉄に関するイベントは続きます。上郷深田遺跡が見つかった栄区で外部の専門家を招き多角的な視点で古代製鉄を語る、横浜の考古学講座「栄区上郷深田古代製鉄遺跡をめぐって(仮題)」を開催します。どうぞご期待ください!こちらの詳細は(公財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターのウェブサイトをチェック!

(文 橋口豊)



たたら製鉄実験の様子



たたら製鉄実験でできた鉄と不純物

(公財)横浜市ふるさと歴史財団
埋蔵文化財センターの
ウェブサイトはこちら▶





イベントやワークショップ等の開催については、
当館ウェブサイト、SNSにて随時お知らせして
いきます！
博物館ウェブサイト▶



表紙資料の解説

千歯扱きは、櫛状に並んだ鉄や木製の歯を持ち、稲や麦を穂から扱き取る農具です。日本の発祥で、18世紀初頭前後の江戸時代に登場しました。千歯扱き以前には、竹や木製の二本の棒で稲を挟んで扱く「扱管」や「扱箸」が使われていました。扱管や扱箸より効率が良く、一度に千把の稲を扱けるほど優れていたことから千把扱きと名付けられたようです。その後、歯(刃)の数が多いことから、千歯(刃)の漢字が当てられるようになりました。

当館には50挺以上の千歯扱きが収蔵されています。一見どれも同じように見えますが、歯の形状や数など、製作地や時代によってさまざまです。また千歯扱きは最も文字情報が多い農具です。一般的に農具にあるのは氏名や入手した日付など所有(使用)者の情報がほとんどですが、千歯扱きでは所有者のほか、製作や修理、また商いなどの情報が、墨書や焼印、歯への刻字や刻印などの方法で記されています。これらの文字情報を紐解くと、横浜で使われた千歯扱きには、市内や近郊で製作されたもののほか、はるか遠く離れた倉吉(鳥取県)や若狭(福井県)から流通してきたものもありました。

横浜の千歯扱きについては、平成25年(2013)の企画展図録「千歯扱き 倉吉・若狭・横浜」をぜひご覧ください。

(文 刈田均)



平成25年(2013)当時の企画展展示風景

横浜市歴史博物館および大塚・歳勝土遺跡公園の利用案内

●開館時間

9:00~17:00(券売は16:30まで)
大塚遺跡を除く公園部分は24時間オープン

●休館日

月曜日(祝日の場合は翌平日)、年末年始
そのほか展示替えなどのため、臨時休館することがあります。

●常設展観覧料

区分	個人	団体 (20人以上、1人につき)
一般	400円	320円
高校生・大学生	200円	160円
小学生・中学生 横浜市内在住65歳以上	100円	80円

■企画展・特別展の観覧料は別に定めます。

■毎週土曜日、小・中・高校生は無料です。

■横浜市内在住の65歳以上の方は「濱ともカード」など証明できるものをご提示ください。

■「身体障害者手帳」「愛の手帳(療育手帳)」[精神障害者保健福祉手帳]をお持ちの方と介護者は無料です。入館の際に手帳または、スマートフォンアプリ「ミライロID」の手帳画面をご提示ください。

■補助犬(盲導犬・介助犬・聴導犬)とご一緒に入館できます。

会期・開催時間等の予定を変更する場合があります。最新情報は出かけ前に、当館ウェブサイトまたはお電話にてご確認ください。

●交通

横浜市営地下鉄「センター北駅」下車徒歩5分
駐車場あり(30分100円)



横浜市歴史博物館

YOKOHAMA HISTORY MUSEUM

〒224-0003 横浜市都筑区中川中央1-18-1

Tel.045-912-7777(代表) Fax.045-912-7781

<https://rekihaku.yokohama-history.org/>

X @yokorekihaku

横浜市歴史博物館ニュースNo.60 2026年8月31日発行

編集・発行 横浜市歴史博物館

デザイン 株式会社フィールド・ノート、柳原梢子(やなぎ堂)